三条ロータリークラブ週報 No. 37 1996. 4. 3 No. 1936

真心の行動
慈愛の奉仕
平和に挺身

1995—96年度国際ロータリーのテーマ

ハーバート Gブラウン
国際ロータリー会長

第2560地区ガバナー——重田政信
会長——石橋育於
会長エレクト——捧賢一
副会長——五十嵐総一
幹事——松谷昊吉
副幹事——五十嵐昭一
SAA——清水良一
副SAA——菊池渉

例会日——毎週水曜日 12：30～
例会場及び事務局——三条市旭町2—5—10 三条信用金庫本店内
例会場——TEL 35—3311
事務局——TEL 35—3477 FAX 32—7095

本日出席会員数	80名中 68名
先々週出席率	90.67 %
前年同期出席率	

ヴィジター

三条南より 峯村輝昭さん
馬場信彦さん
本道 彰さん

先週のメークアップ

3／27 燕へ 外山一郎さん
渡辺喜彦さん

4／1 三条南へ 古沢富雄さん
林 光輝さん
熊倉昌平さん
斎藤弘文さん
山田富義さん

4／2 三条北へ 林 光輝さん

会長挨拶　石橋会長

本日は三条南クラブより馬場信彦さん、本道彰さん、峯村輝昭さん、よくいらっしゃいました。最後までお過し下さい。

今日は当クラブ創立記念の例会日であります。昭和32年４月の発会で皆様も御承知の通り、今年で39回目を迎えたところであります。創設以来代々の会長始め諸先輩の方々の御尽力により、今や80名の会員に大きく成長致しました。改めて敬意と感謝を申し上げるものであります。

いつもですと創立の頃の卓話をいただいておるところですが、本日は特に財団につきまして、藤田パストガバナーよりお話をいただきますのでよろしくお願い申し上げます。

幹事報告　松谷幹事

◎例会変更のお知らせ！

三条北ＲＣ―４月16日(火)
休会　14日振替

三条南ＲＣ―４月15日(月)
花見例会　ＰＭ６：30～
於　おゝの

吉田ＲＣ――４月19日(金)
合同観桜会

◎見附ＲＣより

第43回県下ＲＣ親睦ゴルフ大会のご案内がとどいております。

と　き　　５月10日(金)
ところ　新潟スプリングスカントリー倶楽部　三条コース

◎三条ライオンズクラブより

市内５クラブ現・次年度三役懇談会のご案内がとどいております。

と　き　　４月25日(木)
ＰＭ６：30～
ところ　　三観荘

◎三条市地区交通安全対策連絡協議会より

交通安全フェスティバル in 三条開催のご案内がとどいております。

と　き　　４月７日(日)
９：00～５：00
ところ　　総合福祉センター及びパール金属駐車場

ニコニコＢＯＸ

石橋さん

本日は当クラブ39回目の創立記念の例会日です。おめでとうございます。

小柳さん

ロータリーコンペに出席しました。天気も良く楽しい一日でした。

小越さん

先日の当クラブのゴルフ大会に出席させていただきました。楽しい一日でした。

五十嵐(総)さん

ＲＣゴルフ同好会に参加し、どうしたわけか賞をいただきました。

熊倉さん

当クラブのゴルフ会でブービー賞を頂きました。皆さんの友情に感謝。

渡辺(喜)さん

この前のＲＣのゴルフコンペでハンディに恵まれ、優勝させていただきありがとうございました。

五十嵐(力)さん

昨日、済生会病院でシュヨウ（直りにくいもの）なので手術したほうが良いとのことで処置しました。ご心配頂きましたが、２週間位がまんします。

渡辺(弘)さん

先日、社員が全く予期せぬ事故に会い、九死に一生を得ました。現在、順調に回復しつつあり、よろこんでおります。

広岡さん

創立記念日に付き、紅白の魚(ぎょ)そうめんの吸物にいたしました。

山浦さん、松谷さん

創立記念日おめでとうございます。

４月３日分
¥13,000

ロータリー財団ボックス

五十嵐(寿)さん

次男が就職しました。

船越さん

娘が無事大学へ入学しました。２年間２人が大学です。お金が大変です。

荻根沢さん

次男が外語専門学校へ入学します。大宮にアパートを借り通学致します。又、当人自動車免許を取得し、喜んでおります。

４月３日分
¥23,000

創立例会記念

新釈蜘蛛の糸　菊池　渉 会員

芥川龍之介は小説『蜘蛛の糸』を次のような書き出しで始めています。

ある日のことでございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶらとお歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蘂からは、なんとも言えない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。…

龍之介にならって、ぼくも『新釈・蜘蛛の糸』を以下の如き書き出しで始めようと思います。

（一）

ある日のことでございます。御釈迦様はお浄土の蓮池のふちを、ぶらぶらとお歩きになっていらっしゃいました。そのすぐ後ろをやや控目にお弟子の阿難（アーナンダ）が同じように歩いておられました。お二人のお姿はそれはそれは気高く、気品に満ち、すべてのものが満たされたごようすでございました。

池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蘂（ずい）からは、なんとも言えない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢（あふ）れております。

お浄土はちょうど朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちにおただずみになって、水の面をおおっている蓮の葉の間から、ふと下のようすを御覧になりました。

「見てごらん、阿難よ」

このお浄土の蓮池の真下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の河や針の山の景色が、ちょうど覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、カンダタという男が一人、ほかの罪人といっしょにうごめいている姿が、御眼に止まりました。

「阿難よ、あの男に目覚えはありませんか」

「世尊、確かに見覚えがございます。確かカンダタという泥棒でございます。この男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥棒でございます。」

「そんなに悪い男なのですか」

「はい。それはそれは大変な悪人ですが、それでもたった一つ、善いことをいたした覚えがございます。

と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこでカンダタはさっそく足を挙げて、踏み殺そうとしましたが、『いや、いや、これも小さいながら、命あるものに違いない。その命を無闇にとるということは、いくらなんでもかわいそうだ。』と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。」

「ほほう、そんなことがあったのですか」

御釈迦様は地獄のようすを御覧になりながら、微笑んでおいでありました。このカンダタが蜘蛛を助けたことがあることを考えておられたのでしょうか。そうしてそれだけの善いことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうと、お考えになったのでございましょうか。しばらくじっとカンダタのようすを御覧になっていらっしゃいました。

さいわい、かたわらを見ますと、ヒスイのような色をした蓮の葉の上に、お浄土の蜘蛛が一匹、美しい銀の糸をかけております。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにその糸を下ろしなさいました。

（二）

こちらは地獄の底の血の池でございます。

ほかの罪人といっしょに、浮いたり沈んだりしていたカンダタでございます。なにしろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら闇からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。その上あたりは、墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといっても、ただ罪人がつくかすかな嘆息ばかりでございます。

これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすがの大泥棒のカンダタも、やはり血の池の血に咽（むせ）びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりいました。みんな口々に何かをいっているようなのですが、それが何なのか聞きとることはできないのでございます。

「もしもし。おい、おまえ」。

カンダタは隣り合わせた男に声をかけました。しかしその男はまるでカンダタの声が聞こえないかのように、ただ苦しそうに喘いでいるだけでございます。

「なぜ応えてくれないんだ。俺の声が聞こえないのか」

顔は見えるのに返事はありません。今度は反対側にいる女に声をかけてみました。

「俺はカンダタというんだ。娑婆じゃあちょっとは知られた男さ。おまえさんは何という名だい」

「……」

「何とか応えておくれよ。」

「……」

「誰か、おいおまえ、おまえだよ。なんとかいっておくれ。

どうして誰も応えてくれないんだ。聞こえないのかい。

そうさ俺は確かに極悪人さ。娑婆じゃあ、悪事の限りを尽くした男さ。おまえさんたちの身内を危めたり、おまえさんたちの村を焼いたり、それは、それはたいそう迷惑をかけたことだろうさ。恨みに思っていることだろうよ。それを帳消しにしろなんて、虫のいいことはいわないよ。

だけどよ、今、俺は無性に寂しいんだ。こんなに寂しいと思ったことはかつてなかった。いや、今まで寂しいなんて思ったことは一度もなかった。父親が死んだ時も、御袋と別れた時も、女房が愛想をつかして子供を連れて出ていった時も、寂しいなんて思わなかった。本当だぜ。強がりなんかいってないよ。だけど、今度だけは、こんなに人と話したいと思ったことは初めてなんだ。

誰か、こんなに大勢の人間がいるのに、どうして誰も応えてくれないんだ」

カンダタは更に大きな声で、隣の男の胸ぐらをつかんで叫ぶようにいいました。

「なあ、おまえ。この地獄の血の池の苦しみや、針山の痛みにはへとへとさ。おまえだってそうだろう。だけどよ。娑婆で悪事を働くたびに、こうなることは分かっていたことさ。覚悟もできてた。だけどよ、すぐ側にいる、おまえや、あいつや、こいつと、同じ血の池で喘いでいながら、針の筵に耐えていながら、言葉ひとつ交わせないなんて、こんなに辛いことはないんだ。

なあ、おまえ。後生だから何とかいっておくれよ。一言でいいんだ。『おはよう』だけでいいんだ。いや、俺としたことがどうしたことだろうか、俺はいまだかって朝の挨拶なんか、一度もしたことがないのに…、何でもいいから話しておくれ」

この時のことでございます。何気なくカンダタが頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。

カンダタはこれを見ると、思わず手を拍(う)って喜びました。この糸に縋(すが)りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、お浄土へはいることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山に追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあろうはずはございません。

こう思いましたからカンダタは、さっそくその蜘蛛の糸を両手しっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へたぐりのぼり始めました。もとより大泥棒のことでございますから、こういうことには昔から、慣れきっているのでございます。

しかし地獄とお浄土との間は、何万里となくございますから、いくら焦ってみたところで、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼるうちに、とうとう、さすがのカンダタもくたびれて、もう一たぐりも上の方へのぼれられなくなってしまいました。そこで仕方がございませんから、そこで一休み休むつもりで、糸の途中にぶら下がりながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼってきた甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけないかもしれません。カンダタは両手を蜘蛛の糸にからみながら、「しめた。しめた。」と笑いました。

ところがその時です。ふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。カンダタはこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、莫迦(ばか)のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。

自分一人でさえ断(き)れそうな、この細かい蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに耐えることができましょう。もし万一途中で断れたといたしましたら、せっかくここまでのぼって来た肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落としに落ちてしまわなければなりません。そんなことがあったら、大変でございます。が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上がって、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうに違いありません。

そこでカンダタは大きな声を出して、

「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は俺のものだぞ。おまえたちはいったい誰に尋(き)いてのぼった来た。下りろ。下りろ。」と喚(わめ)きました。もとより言葉の通じない地獄でのことです。そんなカンダタの喚きが他の罪人たちに通じるわけもございません。

その途端のことでございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急にカンダタのぶら下がっている所からプツリと音を立てて断れたのでございました。ですから、カンダタもたまりません。あっという間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見るうちに暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

カンダタは地獄へ落ちていくその瞬間、光を見ました。独楽のようにまわっているカンダタの耳元で声がしたのでございます。

『カンダタよ。』

「なんだい。こんな時に俺の名前をよぶのは」

『あなたはどこまでいっても救いようのない人間ですね。』

「俺もつくずくそう思うよ。俺って男の本性はけちなものさ。」

『また地獄に落ちるかと思うと怖いでしょう』

「それが、不思議なことに、そうでもないんだ。」

『怖くない？』

「天人五衰（てんにんごすい）とかいって、地獄に落ちるはずのない人が落ちるなら、そりゃあ怖いだろうさ。だけど、どっちみち俺は…地獄が住みかさ。少しばかり欲をかいただけさ。後は再び地獄の血の池や針の山が待っていることだろうし、誰も俺と言葉も交わしてくれないだろうけど、まぁ自業自得ってところかと諦めていくさ」

『なかなかいい覚悟だこと』

「悪党はそうでなくちゃなあ」

『カンダタよ。最後にのぞみがあるならいってみなさい。』

「誰だか知らないけれど、ありがとうよ。でも、もういいんだ。もう夢は見ないことにしたんだ。」

『では何ものぞまないのですね。』

「何もないさ」

『ほんとうに』

「本当に何もないさ…。でも…、ただ、時々でいい、俺の話を聞いてくれないかい。無性に誰かと話しがしたい時があるんだ」

『いいでしょう。そんな時、私の名を呼ぶがいい、何時でも何処でもあなたの話を聞いてあげましょう。』

「何とおよびすればいいんで」

『もう、あなたは知っているはずでしょう』

「俺が知ってる？」

『そう、あなたは知っている』

「知っている？…」

『そう…』

「ナムアミダブツ？」

落ちていくカンダタは呼んでいました。

後にはただお浄土の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

（次回へ続く）

例会案内

三条ＲＣ	４月17日例会	夫人同伴グルメ例会　ＰＭ６：00～　於 日本海
	４月24日例会	外部卓話
	５月１日例会	卓話　山田富義会員
三条南ＲＣ	４月15日例会	花見例会　ＰＭ６：30～　於 おゝの
	４月22日例会	卓話　相田明雄会員
三条北ＲＣ	４月16日例会	休会（14日振替）
	４月23日例会	クラブアッセンブリー
	４月30日例会	外部卓話